

二〇一一年度 一般三月入学試験

国 語

〔注意事項〕

1. 試験開始の合図があるまで、問題冊子の中を見てはいけません。
2. 問題冊子は33ページ、解答用紙はマーク・シート1枚です。監督者の指示に従って確認しなさい。
3. 問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。
4. マークは、マーク・シートに記載してある「記入上の注意」をよく読んだうえで、正しくマークしなさい。
5. 受験番号及び氏名は、マーク・シートの所定欄に正確に記入し、また受験番号欄の番号を正しくマークしなさい。
6. 監督者の指示があつてから、マーク・シートの左上部にある「科目欄」に受験する科目名を記入しなさい。
7. 試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。

国

語

(60分

100点

(解答番号

1

5

44

)

第一問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(40点)

三日後あたりから、また少し家の様子が変わった。ただし今度は、家自体が変わったのか住む人間の側に微妙な反応が起こっているのか、判断のつきにくい変化だった。

夜中に鈍い音がして高太郎は目を覚ました。重い物が倒れるか地面に落ちるかしたような音だった。枕から頭を上げて耳を澄ませたがその後は静まり返っている。夢の中だったろうか、と半信半疑のまま頭を枕に戻した時、家のどこかの軋む小さな音が弾けた。最初の響きに間を置いて応えるような音だった。

「何ですか」

横の暗い布団から堤子の声だけが立ち上った。

「……何が？」

(1) 寝惚け声を装って高太郎は曖昧に聞きかえした。

「音がしたでしょ」

「どこかの柱でも軋んだんだろ」

「その前、どすんて響くみたいな」

「そんな気もするけど、眠っていたから……」

「違う。はっきり聞こえた」

声と一緒に布団の上に起き上がる気配が伝わった。眠りとはかけ離れた醒めた声だった。

「どの辺りです？」

「分からない。裏の方じゃないかしら」

「アワただしく身繕いするらしい堤子に引き摺られ、高太郎も仕方なく冷たいガウンを羽織って明かりのスイッチを探った。」

「待って」

堤子の、強張った声が壁を伝う手を押さえた。

「明かりを点けないで」

「どうして」

「誰かいたら危ない」

「もしそうなら、明かりで逃げて行くさ」

確かに気味悪い音ではあったがあれは家の外だったに違いない、と推し量った高太郎は探り当てたスイッチを押した。二つの布団が間を離して並ぶ八畳間がいつもと変わらぬ姿で身の回りに拡がっている。闇を払った眩しさが、家に守られている感じを生み出した。壁や窓や雨戸や屋根が、しっかりと自分達を外から隔てて守ってくれている。聞こえた音は扉から人が地面に飛び降りたとも思われる重さではあったけれど、まさか深夜の侵入者がそんな不注意を冒すとは考えられない、とどこかで自分が高括っているのを意識しつつ冷たい床をフんで高太郎は居間に足を入れた。サイドボードの端に立ててある大型の懐中電灯を掴んで玄関に向かおうとした。

「外に出たら駄目よ」

また堤子の張り詰めた声が背を打った。突然二階に人の気配が起こって足音が聞こえた。一瞬びくりとしたがそれが家の中の音であるとすぐに判断がつく。

「何しているの」

階段を降りて来た秋子が裏返しに着たパジャマ姿で母親の脇から顔を出した。

「変な音がしたでしょ、さつき」

「——知らない、眠っていたから」

「どすん、て響くみたいな」

「二階には伝わりにくかったのかもしれないな」

娘に言葉をかけながら玄関の板の間に明かりを付けようとした高太郎は、腰の辺りのガウンがパジャマごと痛いほど掴まれているのに気がついた。

「出たら駄目だよ、外は」

母親の言葉を正確に繰り返す強い語調で娘が囁きかけた。

「隣の庭に立てかけてあった物が倒れでも——」

そこまで言いかけた時、あれ、と息を止める様子で秋子が玄関の扉の方を指差した。ドアの脇わきに作られた嵌め殺しの明かり取り窓が外からオレンジ色に細長く光っている。

「今、外の明かり点けたの？」

「お前が引張っているから、点けられないじゃないか」

「私、帰って来た時、消したよ」

道の角に街灯が一つ増5セツ5されて蛍光灯の明かりが庭越しに玄関を照らすようになって以降、電気代が無駄だから、と外壁の明かりは寝る前に消す習慣がついている。今夜も風呂ふろから出て最後に錠がかかっているのを確かめた時、明かり取り窓が離れた街灯の光に青白くぼうと浮かんでいたのを高太郎は見た覚えがある。

「消し忘れたんじゃないの？」

堤子が念を押すように秋子の顔を見た。

「絶対ない。そこに靴かたを置いて靴を片方脱いだ時、壁についた手で確かに消したものだ」

「俺が寝る時には消えていたよ」

私は触っていないから、と堤子は激しく首を左右に振った。そのまま三人は黙り込み、軒灯の温かな色に浮かぶ縦に長い磨りガラスの窓を見つめた。その向こうは夜気の中に静まり返って動くものの気配もない。

「わざわざ明かりを付けてから他人のうちにはいつて来る奴もいないだろうから」

腰を掴む秋子の手が離れたのを感じながら高太郎はガウンを羽織り直した。僅かに弛んだ空気の中で秋子が呟いた。

「それなら、誰が外の明かりを点けたの」

「さあ、このうちが自分で点けたんじゃないか……」

ふと零れた言葉に頷く気分が湧いた。

「センサー付きの、猫が通ってもパッと明るくなる外灯はあるみたいだけど、うちのは違うもんね」

家のどこかがみしりと鳴った。聞き馴れたいつもの音らしかった。

「大丈夫なら外へなんか出ないで、少し様子をみましょうよ」

堤子が穴の奥へと引つ込む身振りで居間に引き返しエアコンのスイッチを入れた。雨戸の外では室外機のファンが廻り始めた筈だ。もし本当にアヤしい奴が外に潜んでいるとしても、これでは家の中まではいろうとする気を失うだろう。明日は土の上に大きな足跡でも残っていないかどうか、家の回りをぐるりと調べてみようと思ふと勇み立つ気分で高太郎は温風の出ているのを確かめながらソファに腰をおろした。

「熱い焙じ茶でも飲むか」

「ポットのお湯がまだ使えると思うけどね」

予想に反して堤子が穏やかな声を返した。闇に囲まれた屋内の空気が急に密度を増したようだった。

「私はもう寝るからね」

秋子が母親の肩を軽く叩いて二階へ戻って行く。足音に伝えて幾段目かの階段が小さく軋んでいる筈だった。

翌朝、顔も洗う前に高太郎は狭い庭に出た。玄関の軒灯は消えている。念のため引き返してスイッチを入れてみる。点滅を繰り返す度に朝の淡い電光が無愛想に付いたり消えたりするだけだ。電気代の節約などケチな考えは捨ててこれからは朝まで外の明かりを灯しておこう、と反省する気分を抱いて家の裏へ廻った。

万年塀とモルタルの壁とに挟まれたせまい地面はひっそりと湿って静かだった。眩しいほどに白い花を枝一面に盛り上げていた隣家の白木蓮は咲き終わり、萎れた花が濡れた布の切れ端のように薄茶色に汚れてあちこちに落ちている。いつのものか瀬戸物の白い破片が半ば埋もれながら顔をのぞかせている地面にこれといった異変は見当たらない。塀の上に伸び上がって覗いた隣の庭にも、倒れた材木や転がった石など目につかない。

あれは何だったのだろうか、と首を傾げつつ一巡りして玄関に戻るまでの間に、リフォーム業者に指摘されたのに似た罅が二階の裏側に張り出した庇の下や壁面に走っているのにあらためて気がついた。

「別に異常はなかったよ。ぐるっと調べてみたけれど」

(9) キッチンに立つ堤子に高太郎は努めて軽い声で呼びかけた。

「でもねえ、古い家はやはり不用心ですよ。地震の心配もあるし——」
息を吐くような口調が高太郎を脅かした。

「なんとかかりますよ。私達の歳では無理でも、秋子が住宅ローンを申し込んでもいいと言っているし」

(10) 「秋子が？ あいつにそんな負担はかけられない。自分自身がこの先どうなっていくかも分からないのに」

不意打ちを食らった感じだった。費用の件が出るとその分話が生々しくなりそうで慎重に避けて来たつもりだったからだ。一方、桁の大きな金なので簡単にはことが進むまい、とそれを頼りにしていた節もある。

「家の名義や、税金や、この先の相続や、いろいろ面倒なことがある」

当面は口に出すまいと戒めていた事が次々と零れ出ようとする。

「考えていますよ。考えた上での話よ、秋子だって」

「どんなふう」

高太郎の問いかけに堤子は答えない。答えないまま流しの上で忙しく何かを刻む音を弾かせた。問い詰めるにつれて自分の方が追い詰められそうなる不安を覚えて彼は天井の染みを見上げた。雨漏りに強い家——屋根が漏っても天井で食い止めて健気に屋内には漏らさぬ家——床が揺れても、階段が軋んでも……そんな言葉が次々と降って来るのを飲み込むようにして高太郎は冷えた豆乳のコップを叩いた。

朝まで軒灯を点け続けることにしてから幾日か過ぎたある午後、玄関のチャイムが押された。かかって来た電話に対応している堤子を手で制して高太郎がドアを開けた。先日と似た、しかし今日は枯草色のユニフォームを着た細身の男が立っている。お忙しいところをお邪魔して申し訳ありません、と流れる口調で男は挨拶した。正体はわからぬがまた何か来た、と高太郎は身構えた。

「実は向かいの宇都宮さんなのですが、来週の頭から解体作業にかかりますので車などはいって御迷惑をかけますが、充分注意して仕事は進めますのでどうぞよろしくお願いいたします」⁽¹³⁾

一息に口上を述べると男は首を前に突き出したままトウ突に身を屈めた。⁽¹⁴⁾

「宇都宮さんが？」

高太郎は思わず問い返した。老女と義理の娘が住んでいる女世帯だが、そういえばここしばらくは出入りする人の姿を見かけていない。

「建て替えされるのですか」

「その予定はないようで、後は更地にしておかれると思いますが」

「住んでいた方は？」

「私どもは解体の仕事を頼まれてするだけです」

そうですか、そうですね、と独り言のように繰り返した高太郎はサンダルに足を入れてドアの外に出た。道を挟んだ斜め向か

いの二階家は乾いた表情で立っている。いつであったか、老女が鍵を忘れて中にはいれなくなった深い庇の奥の扉は、曇り空の下の薄暗がりにはひっそりと沈んだままだ。

「足場を組んで、全面にシートを張ってから作業しますので特別のことはありませんが、音だけはお喧しいかと思ひます」
門扉の脇に足を止めた男は宇都宮家を取り囲むようにぐるりと手を廻した。

「ブルドーザーみたいな機械も来るのでしょうか」

何か言わずにいられぬ気持ちに駆られて高太郎は子供のようにな手訊ねた。

「パワーシャベルは使います。埃がたたぬように水をかけながら解体しますから」

「幾日くらいかかるのですか」

「天候にもよりますが、一週間ほどの予定です。足場を外して完全な更地とするまでに」

そこに出現する更地がどんなものであるのか思い描こうとしても眺めが浮かんで来ない。反対に、締め出された老女とともにはいれる所はないかと庭へ廻った肌寒い夕暮れの、ガラス戸から覗いた室内の散らかり具合ばかりが目には浮かんだ。

「仕方がないものね」

誰に言うともなく高太郎は呟いた。

「申し訳ありません。お願ひします」

解体作業への不満を洩らされた^もと取ったのか、男はまた腰を屈めてから逃げるように立ち去った。
⁽¹⁵⁾「先を越されたみたいだよ」

居間に戻った高太郎はソファに腰を落として堤子に言った。

「あのお婆さん、どこかのホームにでもはいつたのかしら。随分前から見ないものね」

⁽¹⁶⁾電話を切つてから玄関のやり取りを聞いていたらしい堤子がガラス戸の外に目をやった。

「それとも、死んだのか」

「お葬式なんか、なかったわ」

「あの娘なら……」

「そう、壊すのね」

⁽¹⁷⁾ 遠くを見つめる目つきになった妻が今何を思っているのか、高太郎には掴めなかった。

「見たくないな、壊すところは」

高太郎は頭の後ろに手を組んで天井を仰いだ。

「二、三日は洗濯物が干せないでしょうね」

堤子の低い声が煙草の煙のように居間に漂って消えた。どこかの柱でも軋んでくれないか、と高太郎は耳を澄ましたが、家は沈黙したままだった。

(黒井千次「家の声」による)

(注) 嵌め殺し——開閉ができないように作られた窓。

問1 傍線番号(1)・(3)・(11)・(12)・(13)の本文における意味として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ

つ選びマークしなさい。

1 1 5

(1) 寝惚け声を装って

1

- ① ちゃんと目覚めていないのをごまかして
- ② 急に起こされて腹立たしいのを隠して
- ③ 寝ていたという失態を繕って
- ④ わざと不愉快そうに見せかけて
- ⑤ 今まで寝ていたふりをして

(3) 高を括っている

2

- ① 最悪の事態に備えて緊張している
- ② 大したことはないと見くびっている
- ③ 予想せぬことに気持ちが高ぶっている
- ④ 予想通りの結果に落ち着き払っている
- ⑤ 冷静な自分の態度に満足している

(11)

生々しくなりそう

3

- ① 中途半端になりそう
- ② ややこしくなりそう
- ③ 緊迫してきそう
- ④ 欲にまみれてきそう
- ⑤ 現実的な話になりそう

(12)

健気に

4

- ① 懸命に頑張つて役目を果たして
- ② 期待される通りの働きを十分にこなして
- ③ 全く機能に異常が見られず安全で
- ④ 常識では考えられないほどひどい状態で
- ⑤ 満足とはいえないが最低限は維持して

(13)

一息に口上を述べる

5

- ① 勢いよくわかりやすい言葉で説明する
- ② 休みなく重要なことがらをまくしたてる
- ③ 早口で一方向的に自分の考えだけを言い切る
- ④ 短い時間で型通りのことわりを述べる
- ⑤ あっさりとした口調で子細を説明する

問2 傍線番号(2)・(4)・(5)・(8)・(14)と同じ漢字を使う語を、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

6
↓
10

(2)

アワ|ただしく

- ① コウ|久の平和を願う
- ② コウ|路の安全を祈る
- ③ 税金のコウ|除枠を広げる
- ④ 経済恐|コウ|にみまわれる
- ⑤ 反対派の態度がコウ|化する

(4)

フ|んで

- ① 雑|トウ|の中で知人に会う
- ② トウ|底思いつかないアイデア
- ③ トウ|議時間を延長する
- ④ 二つの部門をトウ|括する
- ⑤ 土地のトウ|記簿を提出する

(5)

増セ|ツ

- ① 人間社会のセツ|理を学ぶ
- ② 電話線の埋セツ|工事
- ③ 彼は稚セツ|な字を書く
- ④ 交渉の再開をセツ|望する
- ⑤ 前回のセツ|辱を果たす

(8)

アヤ|しい

- ① 子供を誘カ|イする
- ② カ|イ恨の念に駆られる
- ③ その説にはカ|イ疑的だ
- ④ 奇カ|イな言動をする
- ⑤ カ|イ刀乱麻を断つ

(14)

トウ突

10

- ① 卷トウを飾る論文
- ② 哀トウの意を表する
- ③ 無色トウ明の液体
- ④ 荒トウ無稽むげいな小説
- ⑤ 名演技にトウ酔する

問3

傍線番号(6)「ふと零れた言葉に頷く気分が湧いた」とあるが、このときの高太郎の心情を説明したものととして、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

11

- ① さきほどまでの一同の不安な気持ちが少しほぐれた今となつては、それほど大したことではないと思えてきている
- ② まだ誰かが外で聞き耳を立てている可能性もあり、心理的に余裕があるところを見せようと思つている
- ③ 堤子は秋子が消し忘れたと疑っているが、これ以上家の中が険悪な雰囲気になるのを冗談でおさめたいと思つている
- ④ 外の明かりが点いているのは絶対自分のせいではないので、誰が点けたのであろうと興味はないと思つている
- ⑤ 家族の間に不穏な空気が漂うのが気に障り、老朽化した家のせいにもして茶化さなければやりきれないと思つている

問4 傍線番号(7)「大丈夫なら外へなんか出ないで、少し様子をみましょうよ」とあるが、このときの堤子の気持ちを説明した

ものとして、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

12

- ① 謎の物音に対して皆が過剰に反応をするので、安心したふりをして皆を落ち着かせようと思っている
- ② 謎の物音に対する恐怖心が薄れ、不安は残るものの周囲の状況に少し冷静に対処しようと思っている
- ③ 謎の物音は外部からの侵入者によるものではなかったので、夜中に騒ぎ立てたことがばからしく思っている
- ④ 物音の原因を確かめるために外に出るのは危険だと思い、物音のことはもう放^{ほう}っておきたいと思っている
- ⑤ 物音の原因が分からないうちは不安感がぬぐいきれず、玄関を離れ安全な居間へ早く避難したいと思っている

問5 傍線番号(9)「キッチンに立つ堤子に高太郎は努めて軽い声で呼びかけた」とあるが、その理由の説明として、最も適切な

ものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

13

- ① 物音の原因を気にしている堤子に、多少安全性に不安は残るが、少しでも気楽にこの家に住んでほしいと思ったから
- ② 家の周囲には何も異常は見られなかったので、堤子にも昨夜のことは気にせず、楽観的に考えてほしいと思ったから
- ③ 昨夜の物音の原因がよく分からないので自分も納得はいかないが、堤子をいたずらに不安にさせたくはなかったから
- ④ 昨夜の物音の原因は家の欠陥によるものだと察せられ、深刻に話せばリフォームの話題になってしまうと判断したから
- ⑤ 昨夜の物音は家の古さに起因するものだと確信し、原因さえわかればなんとか対処できるだろうと聞き直ったから

問6 傍線番号(10)「不意打ちを食らった感じだった」とあるが、高太郎がこのように感じた理由の説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

14

- ① 自分が一番に昨夜の出来事を確認したと思っていたが、妻も娘も自分に先んじて事態を把握していたから
- ② 子供だと思っていた娘の秋子が、住宅ローンという現実的な計画を立てられるまでに成長していたから
- ③ 自分としては慎重に避けてきたリフォームの話題を、妻と娘が費用の面まで具体的に話し合っていたから
- ④ 多額の金銭が必要で、家族全員で話し合うべきリフォームという事案から、自分が除外されていたから
- ⑤ 自分は現在の家にリフォームが必要だと思えないのに、妻と娘の思いは予想以上に真剣であったから

問7 傍線番号(15)「先を越されたみたいだよ——」や、傍線番号(16)「それとも、死んだのか」のような言い方を高太郎がした意

図の説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

15

- ① あちらこちらで故障が目立ってくるなら家の解体もやむを得ないという印象を妻に与え、自分達の家のリフォームの話題を蒸し返さないように牽制^{けんせい}している
- ② 短い言葉で淡々と語りかけることで、向かいの家に「先を越された」真相を妻が何か知らないかをそれとなくたずねようとしている
- ③ あえて軽い口調で話すことで、あくまで家の解体は向かいの家に発生した出来事であり、自分たちの家のリフォームを促すものではないことを示そうとしている
- ④ 自分たちの家も遅からずリフォームをせねばならないことを覚悟したのだが、あえて冗談めかした言い方をすることで、その思いを知られまいとしている
- ⑤ 向かいの家に「先を越された」ことは残念だが、家の誰かが亡くならない限り、リフォームをするつもりはないことを暗に伝えようとしている

問8 傍線番号(17)「見たくないな、壊すところは」とあるが、このときの高太郎の心情として、最も適切なものを、次の①～⑤

の中から一つ選びマークしなさい。

16

- ① 仕方がないとはいえ、近所の家が取り壊されてしまうのは身につまされてしのびない気持ち
- ② 老女との思い出がいつぱい詰まった家が取り壊されてしまうのは、残念で仕方がないと思う気持ち
- ③ 解体中の家を見ると、自分の老後をどうするかを決断を誤ってしまうのではないかと危惧きぐする気持ち
- ④ 向かいの家が更地になることがどうしても受け入れられず、現実から目を背けたいと思う気持ち
- ⑤ 老女の意志を尊重せず、勝手に家の解体を決めてしまった義理の娘と業者を許せない気持ち

問9 「宇都宮さん」の家の「解体作業」の話題が高太郎に与えた心理的影響の説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の

中から一つ選びマークしなさい。

17

- ① 家を取り壊す決断などやすやすとできるものではないという思いを強め、リフォームには断固反対の気持ちが芽生えた
- ② これからはリフォームや解体の業者がどんどん我が家にも営業のために訪れて来るのではないかと、うんざりしてきた
- ③ 老女が義理の娘から冷たくされていたのを思い出し、自分もいつかは娘に粗末に扱われるのではないかと心配になった
- ④ 自分の住む家も、安全性の問題から自分の意に反して妻や娘が勝手に取り壊してしまうのではないかと不安になった
- ⑤ 近所の家を取り壊されるといふ現実を前にして、この先さまざまな問題にどう取り組むかを考えざるを得なくなった

第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(40点)

あらゆる造形活動のなかで、規模がもつとも大きいばかりでなく、二つの造形意志の対立が最大限に現れるのは、明らかに都市の建設であろう。都市は古くは政治的権力や宗教的権威の意志によって、近くは合理的な行政の計画によって、そのままとまった基礎と大枠を造られてきた。自然発生的な町の場合でも、それが大きくなって存在を意識されるようになると、全体を見直す統一的な方針によって改造されるのがつねであった。都市はまぎれもなく、

1

の産物なのである。

だがその意志ははじめから何と矛盾に満ちて、ひき裂かれた衝動に駆り立てられていることだろう。都市は場所を支配したいという欲望に根ざしているが、場所を支配することが本来、根源的に矛盾した営みだからである。それは第一に場所に印をつけ、土地を囲いこみ、囲まれた場所を聖別しようとする。都市は聖なる土地であり、この世に唯一無二の場所であらねばならない。しかし土地はいったんそれが聖別されると、ただちに力を蓄えて外に普遍化しようとする。聖なる都市は、世界の中心でなければならぬのである。

考えてみれば、都市の造営は一棟の建築を建てるときにすでに始まっていた。建築は場所を選び、その場所を寿ことほぎ、その場所への捧たもげ物として建てられるからである。場所が偉大であり、より大きい尊崇の念を要求しているとすれば、たぶん捧たもげ物はただ一棟の建築ではたりないであろう。第二棟、第三棟の建築が建て増しされてゆくにつれて、人びとはそれらの建築の關係に注目せざるをえない。建築の祝祭の効果がうち消しあわなないように、むしろソウ乗効果が高まるように、人びとは建築のあいだの空間を造形し始めるだろう。やがて人びとの注目は一転して、建築の關係そのものを全体として捉とらえようとする。場所のなかの造形から場所そのものの造形へ、建築から都市計画へと視点の転換が起こるのである。

そして場所そのものの造形は、ほとんど必然的に規則性と統一性をめざすことにならざるをえない。いくつかの中心から放射状に走る大路、あるいは等間隔の碁盤状の道路が町を区切って、空間に反復される構造を与える。街路の両側の建築は高さや様式を揃そろえられ、地上からの眺望にも整然たるリズムが感じられることが多い。古代や中世の都市では、その全体をさらに目に見

える城壁で囲み、四方に規則的に城門をうがって外観をも統一していた。

また一つの文明のなかでは、都市の構造は互いに似ているのが普通であり、同じ構造を反復して増殖する都市群を形成しがちである。ヘレニズム時代の多数の「アレクサンドリア」、中世日本の「小京都」などは典型的な姿だろう。けだし都市はまさにその内部に規則性を持つことによって、外に普遍性を求めて拡張してゆく。なぜなら場所とはつねに世界のなかの場所なのであり、座標象限上の点としてあることによってしか、意味を持つことはできない。場所は場所であることによって、すでにそれを包む空間を予想させる。したがって場所を造形するとは必然的に、外に広がる世界を造形することを含蓄しているのである。

ところで場所を造るとは、一方ではそこにたて籠^{こご}もることであり、他方ではそこから打って出て世界を支配することである。特定の場所を閉じて聖別することであるとともに、その場所から発して全世界に福音を伝えることである。都市の造形はこの劇的な逆説を含む点で、葛藤^{かつどう}するエネルギーを最高度に内に秘める点で、まさに造形のなかの造形だと見ることがができる。しかし対立する二つの意志が働く以上、当然、現実の都市建設にはときに二つの正反対の傾向が現れる。より規則的で統一的で、したがって普遍的な都市と、より深く個別性を刻印されて、地域にたて籠^{こご}もる都市が生まれるのである。

近現代の都市のなかで、ニューヨークやロサンジェルスのような、アメリカの大都市が規則的であることは広く知られている。古い歴史を持つヨーロッパの都市でも、ナポレオン三世による改造を受けたパリのような町はそれらに近い。とりわけパリの凱旋門から星形に延びる道路に貫かれた中心部は、整然たる統一性を見せて俯瞰^{ふくかん}図をひき締める。地上から見る門とルーヴルを結ぶシャンゼリゼー通りは、両側の建物の高さも材質もほぼ揃えられて、ほとんど一体の建築物のようにさえ見える。機能性のイメージに溢^{あふ}れた広大な道路とあいまって、⁸「住むことのできる機械」と呼びたくなるような都市景観を見せるのである。

これにたいして正反対の極を示すのが、おそらくアメリカの観光地ラスヴェガスの街頭風景だろう。町の基本構造は単純であり、この国の他の都市に似た幾何学的な構図を持っている。しかしまさにそれゆえにこの町の中心部を占めるホテル街は、訪れる人の目に付け足し、過剰、逸脱^{いさつ}の饗宴^{きやえん}を見せつけるのである。巨大なスフィックスから、借りものの「自由の女神」、はては機械仕掛けで海戦を演じる海賊船まで、通俗的な想像力のかぎりを尽くした見世物が道路の両側を埋めている。街そのものが常

設の祭りの山車行列であり、固定されたカーニヴァルの行進なのである。

ここでは造形は意図的(9)にあからさまに過剰なのであり、街の基本形にさからって付け足されている。異形(10)の建造物はこの街がほかのどんな街とも異質であり、この世の別世界であることを印づけるために付け加えられている。この場所が賭博(とばく)と遊興のための桃源郷(11)であり、いわば神の存在しない聖地であることを示すために刻みつけられている。この街にとつて、それらはあの中国古代青銅器に加えられた怪獣文であり、先史民族の顔に刻まれた入れ墨なのであつて、そのことの意味を(12)コ示するかのよう(12)にグロテスクなのである。

そしてこの神のない聖地という一点こそ、ラスヴェガスのほかにはない特色であるかもしれない。それは反日常の場所という意味で本来の聖地に似ているものの、それが祀(まつ)るものが享樂だという点で普遍的なセン教(13)の力に欠けている。いいかえればこの街が世界の中心に立つて君臨し、統一的な秩序を拡大しようという意志に欠けている。造形的な言葉でいえば、この街の風景が世界に(14)ハン例を与え、(15)みずからを反復して「小ラスヴェガス」を生む可能性はきわめて小さい。この街は文明的なカク離(16)と孤立を自認する街であつて、そのことを宣言するかのよう(15)に、造形のうえでも例のない

17

性を純粹に顕現しているのである。

こうして歴史を超え文化を超え、造形はつねに対立する二つの原理を含み、それを総合しようとしながら、現実には両極にひき裂かれて成立することがほぼ明らかになった。ここであらためて二項対立を整理しておけば、それはまず全体の統一と部分の反乱、反復する規則性と反復できない唯一性の対立として現れるのであつた。直感的には秩序と逸脱、簡素と過剰の対立として目に映り、さらに深く見れば普遍への志向と個物への固執の対立を感じさせるのであつた。一方が世界全体の造形を志し、そのいわばハン例として個物を形造るのにたいして、他方は世界に背を向けて特定の場所と個物に執着し、それを他から聖別するための刻印として形を造るのであつた。

(山崎正和『装飾とデザイン』による)

問1 空欄番号

1

に入る語句として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

18

- ① 名もない多くの人びとの妥協
- ② 一つの目に見えない造形意志
- ③ 人びとによる民主主義的な合意
- ④ 時の為政者による権力の示威
- ⑤ 土地を含む自然全体への支配欲

問2 傍線番号(2)「場所を支配するということが本来、根源的に矛盾した営みだからである」とはどういうことか。その説明と

して、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

19

- ① 都市は場所を支配したいという欲望に根ざしているにもかかわらず、その場所は人間的な欲望とは無縁な聖なる土地でなければならぬということ
- ② 場所を支配するためには、まず土地を囲いこむための権力が必要であるが、それは場所を聖なるものとする 것과相反することだということ
- ③ 場所を支配することは、土地を聖別し、唯一無二の場所とすることだが、それがなされた後には、土地はすぐに外部に向かって普遍化しようとするということ
- ④ 場所を支配するためには、強大な権力を必要とするが、それはその土地に昔から住んでいた人びとの自然発生的な意志に相反することだということ
- ⑤ 場所を支配することは、土地を聖なるものとするところから始まるが、いったんそれがなされると、政治的権力の影響を受けてしまうということ

問3 傍線番号(3)・(5)・(9)・(10)・(11)の本文における意味として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ

つ選びマークしなさい。
20
 ～
24

(3) 寿ぎ

- 20
- ① 祝福し
 - ② 清め
 - ③ 整地し
 - ④ あがめ
 - ⑤ 宣伝し

(9) あからさまに

- 22
- ① 見苦しく
 - ② 露骨に
 - ③ 所狭しと
 - ④ だしぬけに
 - ⑤ ほんのわずかに

(5) 葛藤する

- 21
- ① 補強し合う
 - ② 混ざり合う
 - ③ せめぎ合う
 - ④ 高め合う
 - ⑤ 奪い合う

(10) 異形の

- 23
- ① あやしげな姿の
 - ② 醜い形の
 - ③ 異国の雰囲気をつたえた
 - ④ 想像を絶する
 - ⑤ きわめて大規模な

(11) 桃源郷

- 24
- ① お金が力を持つ世界
 - ② 景色の美しい一帯
 - ③ 欲望が渦巻く場所
 - ④ 俗世を離れた理想郷
 - ⑤ 懐かしさを感じる故郷

問4 傍線番号(4)・(12)・(13)・(14)・(16)と同じ漢字を使う語を、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

25
～
29

(4)

ソウ乗
25

- ① ソウ体として合格率がよい
- ② 奇ソウ天外のアイデア
- ③ 友人にソウ談する
- ④ ソウ音の激しい地域がある
- ⑤ 戦ソウの傷跡が残る町だ

(12)

コ示
26

- ① 未開地でコ軍奮闘する医師
- ② コ張表現が使われている
- ③ コ人的に意見を述べる
- ④ 凝コ剤を使っている
- ⑤ 縁コを頼って上京する

(13)

セン教
27

- ① セン門知識の豊かな人
- ② 犯人が市内にセン伏する
- ③ 一日一善を実センする
- ④ プロサッカーのセン手になる
- ⑤ 開廷に先立ちセン誓する

(14)

ハン例
28

- ① すべての規ハンとなる
- ② ハン罪防止の方法
- ③ ハン売台数をあげていく
- ④ 余計ハン雑になった
- ⑤ 無罪ハン決が下る

(16)

カク離
29

- ① 外務省の外カク団体
- ② 内カクが総辞職する
- ③ 遠カク操作できる機能
- ④ 敵を威カクする
- ⑤ 不正が発カクする

問5 傍線番号(6)「より規則的で統一的で、したがって普遍的な都市」、(7)「より深く個別性を刻印されて、地域にたて籠もる

都市」とあるが、本文中で挙げられたそれぞれの具体例の組み合わせとして、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ

選びマークしなさい。

30

- | | | | | |
|---|-----|----------|-----|----------|
| ① | (6) | アレクサンドリア | (7) | ニューヨーク |
| ② | (6) | ロサンジェルス | (7) | パリ |
| ③ | (6) | 小京都 | (7) | ロサンジェルス |
| ④ | (6) | パリ | (7) | ラスヴェガス |
| ⑤ | (6) | ラスヴェガス | (7) | アレクサンドリア |

問6 傍線番号(8)「『住むことのできる機械』と呼ばびたくなるような都市景観」とは、具体的にどのようなことを言っているの

か。最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

31

- ① 利便性を追求し最先端の技術が駆使されているが、機械のように無機質で味気ない景観であるということ
- ② 機械的でシステムティックに建築されている都市なので、その住人も快適に過ごせそうに見えるということ
- ③ 機械と人間が共存しているように、都市では建築物と人間のように異質なもの同士もうまく共存して見えるということ
- ④ 合理的で生産性の高い機械のように、都市に住む人びとの日々の暮らしも規則正しく無駄がないということ
- ⑤ 建築物を含む都市の造形がうまく調和し、景観が機械のように整然とした統一性を持っているということ

問7 傍線番号(15)「みずからを反復して『小ラスヴェガス』を生む可能性はきわめて小さい」とはどういうことか。その説明と

して、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

32

- ① ラスヴェガスでは、あまりにも過剰で他とは異質な装飾がなされており、それをまねすること自体に大きな無理があるということ
- ② ラスヴェガスの造形は街の基本形に相反して付け加えられており、世界の中心として同様の秩序を拡大する意志に欠けているということ
- ③ ラスヴェガスは賭博という特殊な目的のために造られた街であり、他のどの土地であってもそのための場所にはなりえないということ
- ④ ラスヴェガスは観光地として賭博と遊興のために造られた街であり、それを建築するための費用は莫大なものになってしまうということ
- ⑤ ラスヴェガスは賭博と遊興に訪れた人びとにとっての最高の夢の空間として造られており、そういう都市はあまり必要ないということ

問8 空欄番号

17

に入る語句として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

33

- ① 抽象
- ② 大衆
- ③ 人間
- ④ 特殊
- ⑤ 模倣

問9

「都市の造営」についての筆者の主張として、間違っているものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

- ① 一棟の建築がなされた時点から、都市の造営は始まっていることにだれも気がついていない
- ② 近現代の都市のなかには、規則的で整然とした都市と過剰で異質な都市があり、それらは正反対の極を示す
- ③ 都市には、古くは、その時代・文明における政治的権力や宗教的権威の意志が色濃く反映されている
- ④ 一つの文明のなかでは、都市の構造は互いに似ており、同じ構造を反復してどんどん増えていく傾向を持つ
- ⑤ 造形はつねに対立する二つの原理を含んでいて、それが最大限に現れるのが都市の建築である

第三問

漢の武帝は、罪を犯して仙界から追放された東方朔という人物を側近としていた。ある日、珍しい色の雀が宮中に飛んで来たのを見た東方朔は、仙人・西王母が訪問する先触れだと武帝に告げる。これに続く次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(20点)

ひとしれず「いまやいまや」とまたせ給ふに、秋八月ばかり、月のひかりくまなきよ、かうばしき風うちふきて、はれのそらのどかなるに、むらさきの雲ひとむらたなびけり。そのなかより、この世ならず、⁽²⁾めもあやなる人、百人ばかりおりくだれり。そのうちに、あるじとおぼしき人、御門にあひたてまつりて、さまさまのこともをきこえさす。⁽³⁾ややひさしくなる程に、このひと、もも七つをとりいだして、その三つをば御門にたてまつらせ給へり。これを御くちにふれ給ひけるより、御身もかろく、御心地もすずしくならせ給ひて、そらにもとびのぼりぬべく、生死罪障もとけぬべくやおぼしけん、「このもも、我がそのにうつしうゑて、⁽⁶⁾たねをもとりてしがな」とのたまひけるに、西王母うちわらひて、「⁽⁷⁾天上のこのみの人間のとどまりがたくや」となん、いふにもたらずげにおぼせり。また、「⁽⁸⁾ふしのくすりや侍る」とたづねさせ給ふにも、「生老病死の下界にむまれ給ひながら、いかでかふしのくすりをもとめさせ給ふべき、⁽⁹⁾はかなき御心なり」ときこえさす。西王母のみにあらず、かひなきおろかなる心にも、むかしのかしこきひじりの御門の御ことばとおぼえず。

かくて、しばしばかりあるに、上元夫人に雲環の瑟うたせて、⁽¹⁰⁾拳妃瓊ときこゆる仙人まひけり。たまのかんざしをうごかし、にしきの袖をひるがへすありさま、めぐれる雪にことならず。御門、これをみたまふに、おもほえず御袖ぬれにけり。この世のがくのこゑは物のかずならずおぼえ給ひけるより、御心もいたくあくがれぬるに、やうやうあけがたになる程に、「その御ゆかのしたにかくれるて侍りける東方朔は、仙宮の人なりしかど、かのみちとせにひとたびなるもをも、三たびまでぬすめるつみによりて、しばらく人間にくだされたる。とがをあがひてのちは、また、天上にかへりきたるべきなり」とのたまひて、むらさきの雲たちかへりぬ。

むらさきの雲たちかへりゆきしよりこころはそらにあくがれにけり

この後は、いとど御心もそらにあくがれて、いよいよ仙をねがひたまひけり。

〔唐物語〕による

(注1) 上元夫人——仙人の名簿を管理する仙女。

(注2) 雲環——冠のような雲、または舞楽のときに身につける冠の名。

(注3) 瑟——形が琴に似た楽器。

(注4) 拳妃瓊——西王母の侍女。

問1 傍線番号(1)「給ふ」・(4)「給へ」・(8)「給ふ」の敬意の対象の組み合わせとして、最も適切なものを、次の①～⑤の中から

一つ選びマークしなさい。

35

- | | | | | | | |
|---|-----|-----|-----|-----------|-----|-----|
| ① | (1) | 東方朔 | (4) | 御門 | (8) | 西王母 |
| ② | (1) | 御門 | (4) | 御門 | (8) | 御門 |
| ③ | (1) | 御門 | (4) | あるじとおぼしき人 | (8) | 御門 |
| ④ | (1) | 東方朔 | (4) | あるじとおぼしき人 | (8) | 御門 |
| ⑤ | (1) | 東方朔 | (4) | あるじとおぼしき人 | (8) | 西王母 |

問2 傍線番号(2)・(6)・(7)の口語訳として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

い。 36

い。 38

(2) めもあやなる人 36

- ① 見た目を飾り立てた人
- ② 見るからに不思議な人
- ③ いかにも身分の高い人
- ④ まぶしいほど麗しい人
- ⑤ 美しい綾織物を着た人

(6) たねをもとりてしがな 37

- ① 種を取り戻すことにしようか
- ② 種をも戻すべきであろう
- ③ 種を秘密に採ったのだな
- ④ 種を採ってもらいたいのだが
- ⑤ 種も採りたいものだなあ

(7) 天上のこのみの人間のとどまりがたくや

38

① 天上の人の嗜好は人間には理解できないだろう

② 天上の果物は人間界では育たないだろう

③ 天上に住む者は人間界に長くいることは耐えられない

④ 天上の樹木は人間には扱いにくいのではないか

⑤ 天上の人であるこの私を人間が泊めるのは難しいだろうか

問3

傍線番号(3)「ややひさしくなる」の文法的説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

39

① 副詞十形容動詞の連体形

② 感動詞十形容動詞の連体形

③ 名詞十形容詞の未然形十断定の助動詞の連体形

④ 感動詞十形容詞の未然形十四段活用動詞の連体形

⑤ 副詞十形容詞の連用形十四段活用動詞の連体形

問4 傍線番号(5)の「ぬ」と用法が同じものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

40

- ① さらば賜りなむ
- ② 大殿ごもらで明かし給ひてけり
- ③ 風波やまねば、なほ同じ所にある
- ④ 大将いとま申して、福原へこそ帰られけれ
- ⑤ あはれ今年の秋もいぬめり

問5 傍線番号(9)「はかなき御心なり」とあるが、西王母がこのように言う理由として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

41

- ① 桃の種に加えて不死の薬まで欲しがる様子を卑しいと感じたから
- ② 不死の薬を手に入れてずっとこの世にいてもむなしただけだから
- ③ 不死の薬を求めてもこの世では死は避けられないことだから
- ④ 人間界の者でありながら不死の薬が本当に手に入ると考えているから
- ⑤ 死を恐れて不死の薬を求めるようでは頼りにならない皇帝だと思ったから

問6 傍線番号(10)「おもほえず御袖ぬれにけり」とあるが、武帝が涙を流した理由として、最も適切なものを、次の①～⑤の中

から一つ選びマークしなさい。

42

- ① かつて宮中の行事の折に、雪が趣深く風に舞っていた日が思い出されて、懐旧の念にとらわれたから
- ② 美しい楽曲に合わせて踊る仙人の様子が、風に舞う雪と見紛うほどすばらしく、感動を覚えたから
- ③ 雪の降る中で披露された仙人の舞と演奏が、人間界での出来事とは思われないほど幻想的だったから
- ④ 人間と仙人による一期一会の演奏と舞踊のみごとさが、かえってこの世の無常を感じさせたから
- ⑤ これまで伝えられていなかった音楽と舞踊を、仙人が特別に伝授してくれたことに感激したから

問7 本文の内容に合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

43

- ① のどかに晴れた空にかかった月が急に陰り、紫の雲があたり一面を覆うと、その中から多くの仙人たちが降りてきた
- ② 仙人が桃を三個武帝に献上したところ、それを口にした人々は心身ともに軽くなり、空に飛び上がれそうなほどだった
- ③ 西王母は、とるに足りない質問を繰り返す武帝に対して、立派な聖人に学んだ昔の帝王の言葉を用いて諭した
- ④ 三個の桃は東方朔が仙界から盗んで持ち出そうとした桃だったため、地上の人間に与えることにしたと西王母は語った
- ⑤ 西王母たちが紫の雲に乗って帰ってしまうと、武帝は以前にもまして仙人になりたいという気持ちが強くなった

問8 本文の出典である『唐物語』は平安時代末期に成立した、中国の説話二十七編を意識した説話物語集である。同じジャン

ルの作品を、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

44

- ① とはすがたり
- ② 大和物語
- ③ 義経記
- ④ 日本霊異記
- ⑤ 住吉物語